

1640年代の出版業界とジャンセニスム論争(その一)

野呂 康

La constellation des imprimeurs-libraires dans les années 1640 et la polémique autour du jansénisme

Yasushi NORO

要旨

今日ジャンセニスムといえば、神学者コルネリウス・ジャンセニウス(1585-1638)の名に因んだ社会運動を指す。彼の遺稿『アウグスチヌス』と、その擁護者であるアントワヌ・アルノーによる『頻繁なる聖体拝領について』は、1640年代に大きな論争を巻き起こした。これがいわゆる初期ジャンセニスム論争である。この論争は当時最大のメディアである書物を中心に展開されたがゆえに、文書の出版に携わる出版業界の動きとも深く関係したのは間違いない。但し、予めジャンセニスムとそれに共感した業者がいたというのではない。宗教思想や業者間の対立が折り重なる場でこそ、ジャンセニスムなるものが産み出され、漸次的に規定されてゆくのである。

キーワード：ジャンセニスム，論争，出版，メディア，頻繁なる聖体拝領について

はじめに¹

ジャンセニスムとは1640年以降18世紀に至るまで、主に今日のベルギーとフランスを中心に展開された運動である。名称は神学者コルネリウス・ジャンセニウス(1585-1638)に因む。ジャンセニウスの著書『アウグスチヌス』は、1640年にルーヴェンで、翌年にはパリで遺稿として出版された。この出版という行為はイエズス会を中心とした敵対勢力を刺激し、やがて論争を巻き起こすにいたる。また、ジャンセニウスの擁護者の一人であったアントワヌ・アルノーは『頻繁なる聖体拝領について』を出版し、論争に参戦する。論争は当初の主題を離れ逸脱し、複数の著者を巻き込みながら次第に激しさを増す。論争のこの時点では、未だ「ジャンセニスム」という、後に敵方から投げつけられた蔑称は存在していないか、存在はしていても、今日用いられる＜運動＞の意味では用いられていない。この論争は、1648年に

¹ 本稿は、パスカル研究会第151回例会における発表「フランスにおける『アウグスチヌス』の再版と『頻繁なる聖体拝領について』の出版」の「第二部」(後半部分)を基にしている。前半は既に以下の論考として発表した。野呂康「サン・シランの残像 ― 論争における操作と、その展開」国際センター、岡山大学教育開発センター、岡山大学言語教育センター、岡山大学キャリア開発センター『大学教育研究』(大学紀要), №10, 2014, pp. 1-14.

始まる内戦（フロンド）が始まるまで継続する。以上が、本稿が対象とする 1640 年代の初期ジャンセニスム論争の概略である²。

フランスではジャンセニウスの『アウグスチヌス』の再版とアルノーによる『頻繁なる聖体拝領について』の出版以降、多様な論点が渾然一体となり、論争は複雑な様相を呈した。恩寵、聖体拝領、「教会の二人首長説」などの教義をめぐる争いばかりか、『アウグスチヌス』に関する教皇令の真偽、そして一見すると論争に無関係な故サン・シランの像をめぐる諍いなどが同時進行する³。

本稿では些か視点を転じて、メディアとして初期ジャンセニスム論争を支えた出版と論争書の関係に着目する。文書を執筆する著者ではなく、別の発信者としての書籍商とジャンセニスム運動の関係を考えてみたい。

一般に史家の眼差しは、文書を執筆し思想の優劣を競う論争家に注がれるが、論争書には必ずそれを印刷・出版・販売する書籍商・印刷業者が存在する。この、活字を組みインクをのせ書籍を流通させる業者の技術的経済的な営みが、論争において決定的な重要性を持つといえ、奇を衒った主張にすぎないと一笑にふされようか。特にジャンセニスムのように、多くの神学者や作家を巻き込み、長くフランス社会でその思想を議論されてきた運動を記述するのに、思想を展開した作家と、メディア（媒体）にすぎない書籍を生産する業者を、同じ土俵で扱おうとすれば、甚だ伝統を無視した、奇抜で無益な試みととられるかもしれない。だが、審美的な判断に属する内在的な価値を前提とするのでなければ、書物の価値と意味は常に外在的な要素と切り離しては考えられない。ジャンセニスムが興隆した 1640 年代が出版業界の低迷期・転換期にあたり、ジャンセニスム関連の論争書と、フロンド期のパンフレットの爆発的增加が業界を潤し、一大社会現象となった一事をとりあげても、書物史と思想史を合わせて考察することには十分な理由があるといえる。いつ誰がどのタイミングで出版するかというのは、決して偶然でも、どうしても良い選択でもない。本稿は、その出版の必然を論争の文脈に位置づけることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。まず、一般にジャンセニストによる最初の「^{マニフェスト}声明文」と言われるアントワヌ・アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』（1643 年刊行）を出版した書籍商アントワヌ・ヴィトレと当時の出版業界の状況を概観する。次いで、出版業者間に生

² 1649 年以降の 5 命題論争と、その渦中における出版允許をめぐる闘争については、以下の拙論を参照されたい。野呂康「フランス近世出版統制史の記述について ― その用語と定義」（「ジャンセニスムと出版允許(1)」）、武蔵大学『人文学会雑誌』、第 38 巻第 2 号、2006、63(156)–85(178)；同「フランス近世出版統制と文芸の成立 ― 文芸を創る国王秘書官」（「ジャンセニスムと出版允許(2)」）、『関西大学西洋史論叢』、第 9 号、2006 年、pp. 17–34；同「雇われ検閲人は金を受け取ることができるか ― フランス近世出版統制とジャンセニスム」（ジャンセニスムと出版允許(3)）、成城大学フランス語フランス文化研究会編、『AZUR』、第 8 号、2007、pp. 53–72；同「公認か『承認』か ― フランス近世出版統制とジャンセニストの出版戦略」（ジャンセニスムと出版允許(4)）、成城大学フランス語フランス文化研究会編、『AZUR』、第 9 号、2008、pp. 55–74。

³ 複数の論争が絡み合い、その中からサン・シランの表象を賭けた論争が焦点化されてくる歴史的な文脈に関しては、註 1 に記した拙論で詳述した。

じていた紛争，そして業界の力関係と配置図を示す．1640 年代，アルノーの書が出版された時期は，奇しくも出版業界再編成の時期に該当する．最後に，そのようにして浮き出てきた地勢図をジャンセニスム論争に読み込んでいきたい．但し純粋に紙幅の制約から，本稿では当時の業界内の状況を記述するにとどめ，次稿⁴において具体的に『頻繁なる聖体拝領について』が巻き起こした論争に踏み込み，ジャンセニスム論争に従事した業者名を挙げながら，より詳細な地勢図を描くことにする．したがって，本稿では敢えて結論らしきものは提示せず，あくまで論争と出版業界の関係性を記述するにとどめたい．

本稿の内容

ヴィトレと書籍商組合をめぐる事件

1644 年 2 月の監査

エチエンヌ事件の終結

1643 年，ヴィトレとクラモワジの新たな対立

次稿の内容

1640 年代のジャンセニスム論争：見取り図

『頻繁なる聖体拝領について』をめぐる論争

1644 年，論争の飛躍的发展

結論

ヴィトレと書籍商組合をめぐる事件

『アウグスチヌス』のフランスでの再版と『頻繁なる聖体拝領について』の出版の時期，折しも出版業界は再編成の渦中にあった⁵．前世紀以来王権と教権は，特定の業者に独占権を付与しつつ出版統制の手段としていたが，必ずしも十全に機能していたとは言い難い．加えて，業界の花形であった宗教書の売り上げが落ちはじめ，その分野を中心に編成されていた業界全体が深刻な危機に瀕していたのである⁶．書籍商に専門があるからには，業界内での力関係も分野の浮沈に連動するというのは容易に想像がつく．宗教書の不振を受けた出版業界全体の低迷を背景に，ジャンセニスム論争が数多の論争文書の出版を促し，業界の一時的な活性化に貢献したのは確かである．

さて，1640 年代前半において，業界再編成の台風の眼となったのが，アントワヌ・エチエンヌとアントワヌ・ヴィトレ⁷という二人の書籍商であった．

当時の書籍商の世界でエチエンヌ家といえは，名門中の名門である⁸．1594 年生まれのア

⁴ 「1640 年代の出版業界とジャンセニスム論争（その二）」として，岡山大学『ヨーロッパ言語文化研究』第 35 号に掲載を予定している．

⁵ Henri-Jean Martin, *Livre, pouvoirs et société à Paris au XVII^e siècle*, Genève, Droz, 1999 (la première édition en 1969), 2 vol, pp. 343-344. 以下においてこの文献は，HJM. と省略して引用する．

⁶ *Id.*, p.419.

⁷ Antoine Estienne(1594-1674) : Antoine Vitre(?1600-1674).

⁸ エチエンヌの生涯に関しては，主にアンリー・ジャン・マルタンの前掲書およびミショーの記

ントワヌは1612年にパリへ上京し、カトリックに改宗する。以来、彼はデュペロン枢機卿の庇護を受け、聖職者会議で執達吏の職を得る。1613年には修業期間を経ることなく、植字工の作業所を開設した。貴顕との関係が伺えよう。ところがその後、アントワヌは破産の危機に見舞われる。特に1631年から1636年の間債権者に追われ、ついには投獄の憂き目を見る。王権の介入で出獄したが、それ以降、書籍商組合の中で不満分子の首領となった。

「当時の植字工にあって、最も著名で、おそらくは最も活動的であった」アントワヌ・ヴィトレ⁹は、16世紀末、一印刷業者の息子として生まれた。経歴の当初こそ慎ましいが、1629年には書籍商組合の調停役(consul)と組合長補佐(adjoint)に選任される。翌年には「王の印刷業者」に任命され、東洋諸語で書かれた著作物の印刷に携わる。1631年にリシュリユが王から書籍商の任命の権利を得ると、ヴィトレは第三次「慣用会」に迎えらる¹⁰。1635年には、破産したアントワヌ・エチエンヌに代わりフランス聖職者会議の公認書籍商となった¹¹。才気にも技能にも長けたヴィトレは、当時の大書籍商であるクラモワジと並んで、大法官セギエの庇護に入ることができた。1639年、ヴィトレはパリの書籍商組合の組合長(syndic)となり、1644年までこの職にあった。ヴィトレはクラモワジと双璧をなす当時最大手の書籍商として業界内に君臨していた。

経歴を回顧的に眺めるなら、ヴィトレは王権の庇護を受けながら、同時に、アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』のような、いわゆる「ジャンセニスト」の書も出版していたことになる。聖職者会議公認の書籍商であり、当然のことながら、多くの高位聖職者や司教の知己を得ていた。また、リシュリユやセギエの信任が厚かったからこそ、1643年には他の書籍商の監査役にも任命された(後述)。それゆえ、王権のジャンセニズムに対する敵愾心を解釈の前提とするなら、ヴィトレの立場は矛盾に満ちている。歴史家マルタンは、この矛盾を次のように説明している。

特にヴィトレは、以上のような接触の過程で信頼を吹き込み、ジャンセニスト派(parti janséniste)の首脳陣の信頼を得ることができたのであり、党派公認の主席書籍商となったのである。それにはヴィトレが聖職者会議の命令で、ペトルス・アウレリウスの第二版¹²を出版していたことも起因していた¹³。

述に負う(HJM., pp.334-335 ; la *Biographie de Michaud*).

⁹ ヴィトレに関しては、主に以下の文献を参照した。Henri-Jean Martin, « Renouvellements et concurrences » in *l'Histoire de l'édition française*, p.383 (以下では *HEF* と略す) ; HJM., p.375 ; la *Biographie de Michaud* ; Jean de La Caille, *Histoire de l'imprimerie et de la librairie où l'on voit son origine et son progrès, jusqu'en 1689. Divisée en deux livres*, Paris, Jean de La Caille, 1689, pp.241-242 (以下では La Caille と略す)。

¹⁰ 「慣用会」(Compagnie des usages)とは宗教書の出版に関して、王権から独占権を付与された書籍商・印刷業者の団体である。ローマカトリックの「慣用」に則った書籍を出版する会として結成された。前掲拙論「フランス近世出版統制史の記述について」, pp.161(80)-160(81)。

¹¹ HJM., p.375。但し、*HEF*では1633年とされている(p.383)。

¹² BNFのカタログによると、ヴィトレは1642年、1646年に *Petri Aurelii theologi opera, jussu et impensis cleri gallicani...*なる書を刊行している。ちなみに、ペトルス・アウレリウスはサンシランの筆名といわれる。

このように書くマルタンは、『頻繁なる聖体拝領について』がジャンセニストのマニフェストであるとする、一般に流布した見方に予め影響されていないか。ヴィトレが王権の信頼を得つつジャンセニストに協力したとして、そのような見方が矛盾に映ずるのは、『頻繁なる聖体拝領について』の著者アルノーが「ジャンセニスト」であり、後に「ジャンセニウスの誤謬」が異端宣告を受け、王権の敵とみなされたからである。実際には前稿で示した通り、1640 年代前半には、いわゆる「ジャンセニスム」は未だ存在していなかった。ゆえにヴィトレには、王権に歯向かうジャンセニストを支持している意識などあるはずもなかった。

17 世紀前半、書籍商・印刷業には徒弟制があり、印刷所や店舗の設置基準や親方(*maître*)の数にも詳細な規定があった。1632 年から 1637 年にかけて組合では新たに 23 人の親方を受け入れたが、常々その増加は問題視されていた¹⁴。1638 年、書籍商コトゥローが組合長の任期を終え、新たな組合長を選出する段になり、既得権を有した大書籍商とその他の書籍商の間の軋轢が表面化する¹⁵。紆余曲折を経て、1639 年 9 月 28 日にヴィトレが新組合長に選出され、ジャック・ケネル、ジャン・ギユモ、クロード・カルヴィル、そして装幀工のトマ・ド・ヌヴィル¹⁶が組合長補佐となった¹⁷。

ヴィトレはすぐさま、組合の再編成に着手する。違法に開業している店舗を取り締まり、親方への昇進の登録を義務づけ、規則遵守を徹底しようとした。ヴィトレの手続きは手荒く厳格すぎたといわれる。1641 年 10 月、ヴィトレの任期が切れたところで、再び争議が持ち上がることになる。

この度の争議では、投票権を有する親方の大半がヴィトレの側につき留任を要請したが、敵対勢力はシャトレ裁判所の民事代理人を担ぎ出し、仲間内で 18 人の親方を指名する。かつての組合長や組合長補佐で構成されたこの 18 人が、ヴィトレの組合長補佐であったケネルを組合長に選出してしまう。1640 年以来、ケネルは慣用会の独占権をめぐりヴィトレと対立していた。ところが新組合長に選出されたケネルはすぐさま辞退し、今度はアントワヌ・エチエンヌが選出される。前述の通りエチエンヌには破産の前歴があったが、同業者間での人気は相変わらずであった。

こうした状況に加えて、エチエンヌは大書籍商クラモワジを憎んでいた。両者の対立は、少なくとも一年前、王立印刷所の創業時に遡る。1639 年、王立印刷所の創立が決定された。

¹³ HJM., p.455.

¹⁴ HJM., pp.555-556.

¹⁵ 「1638 年以来状況は悪化の一途をたどり、一触即発の事態にまでいたる。新組合長選出の年である 1638 年以降、1639 年に王権が選出方法を変更したこともあり[1639 年 6 月 21 日]、組合において大書籍商と店舗を持たない書籍商の間で対立があったため、フロンド期には危機的状況が頂点に達することになる。1643 年から 1647 年の間に、こうした騒動にジャンセニスムをめぐる最初の論争が付け加わる。1640 年の『アウグスチヌス』の出版と、1643 年のローマによるその断罪が引き起こしたあの論争である」(HEF, p.376)。幾つかの難点を含む、あまりに大卒な説明ではあるが、本文にて詳述するように、出版業界の再編とジャンセニスム論争を関連づけたのはマルタンの卓見である。

¹⁶ Jacques Quesnel ; Jean Guillemot ; Claude Calleville ; Thomas de Neuville

¹⁷ HJM., p.556.

技術指導はセバスチアン・クラモワジに任されたが、エチエンヌはこの職を狙っていたといわれる。最終的に、エドム・マルタン¹⁸が活字所の長に選ばれ、クロード・クラモワジが作業指導者に、ガブリエル・クラモワジが副所長となる。したがって、この諍いはセバスチアン・クラモワジの全面的な勝利で幕引きとなり、印刷所は1640年11月に操業を開始した。この状況でエチエンヌが反乱分子の首領として組合長に選ばれたのは、明らかにエチエンヌが大書籍商の一群と対立していたからである¹⁹。

エチエンヌの背後には、小書籍商、露天商、装幀工、金箔装幀業者がいたが、²⁰同様に大方の印刷業者もエチエンヌに加勢した。²¹こうして組合は完全に二分された。

1643年10月2日、国務会議の決定でクラモワジ、ヴィトレ、ブレズの三名が共同の組合長に指名される。さらに同月24日の決定で、4人目のソンニウス²²と4人の補佐が任命された。組合長に選出された4人は総てセギエの庇護を受けた書籍商である。王権は事態を収拾するのに、改めて寡占体制の強化に乗り出したといわれる。²³10月2日の決定に続き、新組合長は規則遵守のため、パリの全印刷所の監査を命じられ、印刷に際した大法官の許可状取得を監視するよう求められた。またパリの全書籍商・印刷業者に、印刷中の書籍、印刷の状態、労働場所の申告が義務づけられた。翌1644年2月末には、実際に組合長が印刷所を巡回することになる。²⁴

1644年2月の監査

クラモワジは、この監査の記録を残している²⁵。印刷業者ジュリアン・ジャカン「大学長からの注文で」²⁶、ゴドフロワ・エルマン²⁷が書いた反イエズス会の文書を印刷しており、

¹⁸ Edme Martin

¹⁹ 歴史家マルタンはエチエンヌの敵が作成した文書に参照をうながしている(HJM., p.557).

Factum pour faire voir l'insolence de Jeanne Leclerc contre Antoine Estienne son mari. V. aussi Mémoire contre Estienne qui veut estre syndic (筆者未見)。

²⁰ HJM., p.558.

²¹1644年の監査訪問時に、エノー(Jean Hénault)の印刷所はヴィトレによる執拗な取り調べを受けた。ケネルにもエチエンヌ側につく独自の理由があったという(HJM., p.558).

²² Claude Sonnius

²³ HJM., p.558.

²⁴ 巡回記録の抜粋が、以下の文献に掲載されている。Lepreux, « Une enquête sur l'imprimerie de Paris en 1644 » dans *Le Bibliographe moderne*, 1910. V. HJM., p.78.

²⁵ HJM., pp.561-562.

²⁶ *Requete, proces verbaux et advertissemens faits a la diligence de Monsieur le recteur, et par l'ordre de l'Université, pour faire condamner une doctrine pernicieuse & préjudiciable à la Société humaine, & particulièrement à la vie des Rois. Enseignée au collège de Clairmont, detenu par les Jésuites à Paris*, Imprimez par le mandement de monsieur le recteur de l'Université, chez Julian Jacquin, Imprimeur à Paris. M. DC. XLIV(BNF, 8-H-20440).

²⁷ Godefroy Hermant (1617-1690)

これを理由に後日投獄される²⁸。また書籍商ブレゾは²⁹、イエズス会士プトー神父の『改悛について』を印刷していた。これは同年、クラモワジ自身のところから出版される書である。また他所では、ジャン・ピエール・カミュの『改悛と聖体拝領の効用』が発見された。後に書籍商アリオが出版する書である³⁰。これら二著は、アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』に対する反応として書かれた書である。ここでは、ジャカンが大学の庇護下であり、クラモワジ（とアリオ）はイエズス会と密接な関係にあった事実を確認しておきたい。

ところでこの時カルヴィルは、ヴィトレと同じ書名の本を印刷していた³¹。カルヴィルとヴィトレは協働していたのか。真実はわからない。しかし、両者は共にセギエ御用達の書籍商であり、別々にではあるが、同じ時期にコンリウスの書を出版している³²。この度の訪問では、同じ題名の書をつきつけることで、まるで監査役のクラモワジに共同作業を見せつけているかのようである。

1644年2月の監査に関して、歴史家アンリー・ジャン・マルタンは次の三点を指摘している。第一に増加する書籍商の制限と統制の必要があったこと、第二に「大法官の庇護下の大書籍商とその他の書籍商の、組合内での対立が悪化」していたという状況、第三に「ジャンセニスム論争をめぐる著作と小冊子の増加」に伴う、王権の出版統制への配慮である³³。第一と第三の点に関しては、マルタンはいたるところで強調しているので、この場では第二点すなわち書籍商の対立についてもう少し掘り下げてみたい。

ところで監査時の書籍商による申告が、どの程度まで現実を反映しているかはわからない。マルタンは、「生まれつつあったジャンセニスム論争の関連文書は、どんなものでも」書籍商が隠していたとしているが、これは推測の域をでない。未だ「ジャンセニスム」も存在せず、半年前に出たアルノーの『頻繁なる聖体拝領について』が仕掛けた論争が漸く党派を分節し始めた時期である。したがって申告の背後に隠されているものがあるとすれば、それは危険な「ジャンセニスト」の書ではなく、むしろヴィトレとクラモワジという二人の監査役、あるいはそれぞれの後ろ盾ともいえるべき聖職者会議・神学部とセギエ・イエズス会の忌み嫌う書であったはずである。

ここで再び、1639年の新組合長選出をめぐる争議と監査の関係をみてみよう。ヴィトレは

²⁸ HJM., p.562. ジャカンは1644年4月6日に釈放された。

²⁹ G. Lepreux, p.20. ブレゾ(Gilles Blaisot)は1610年から1659年まで営業していた書籍商・印刷業者である。

³⁰ アリオ(Gervais Alliot)は1621年に書籍商となり、世紀半ばには大書籍商の仲間入りを果たす(HJM., p.350, n.88 ; La Caille, pp.253-254)。

³¹ *Augustinus Pauperum* なる同名の書だが同定はできない。ヴィトレは同題を挙げつつ、「聖アウグスチヌスの二巻本」としている。

³² カルヴィルはフロラン・コンリウスが1625年に執筆した書を、1641年に出版している。ところで、カルヴィルがアウグスチヌスの書を印刷した形跡はない。ヴィトレは1643年に以下のアウグスチヌス関連の書を出版している。*Sanctus Augustinus per seipsum docens catholicos et vincens pelagianos*, Parisiis, apud Ant.Vitré, 1643. in-4 et in-16（本文にて後述）。BJB2218(Léopold Willart, *Bibliotheca Janseniana Belgica*, Bibliothèque de la Faculté de philosophie et lettres de Namur et J.Vrin, 1949. 以下ではBJBと略す)。

³³ HJM., p.563.

1640 年 11 月 27 日の組合の会合を欠席し、代わりに本人が用意した覚書が読み上げられた。折しも、1631 年に始動した慣用会は、最初に付与された 10 年の特権が終わる時期にさしかかっていた。ヴィトレは組合長の職を辞職し、慣用会の特権に関する「和解策」を提示した。最終的に、会合ではヴィトレと組合長補助を慰留し、白紙委任状を渡した³⁴。ここでは、慣用会をめぐる大書籍商とその他の書籍商の対立、そしてヴィトレと、慣用会から排除されたケネルの対立、この二つの対立を確認しておこう。

以上のような事態を経て、王権の特権を付与されていた慣用会と船団会(*la Compagnie du Navire*)の組織に変化が生じる。慣用会は教会関係の書物の印刷独占権を失う。船団会が有していた独占権は更新され、クラモワジが引き継ぐ。クラモワジは聖アウグスチヌスの著作の出版権を得、ブレス、アリオ、ソリ、ユレはそれぞれ独自の出版権を手に入れた³⁵。この他、ロコレ、ヴィトレなども類似の特権に与る³⁶。セギエは特権をばら撒くことで、出版統制システムの立て直しを図っていたといわれる。

王権による特権付与政策は何も目新しいものではない。しかしセギエが 1641 年 3 月 3 日に認めたこの度の特権は、訴訟沙汰にまで発展した。クラモワジは、1643 年 3 月 10 日の国務会議の決定で、アリオによる聖ベルナルドゥスの著作の印刷差し止めに成功する。ロコレはセギエの庇護を背景に、元来自由に印刷されていた、パリで用いられる教会の書(*Le Livre d'Eglise*)の独占権を入手し、他の書籍商に対して無修正版の印刷を禁止させようとした。この特権に対して、パリ大司教は教区公認の書籍商クロップジョー(*Clopejau*)に、同書の古い版本の独占的な印刷許可を出した。その他の書籍に関しては、ロコレがカルヴィルなどの同業者と共有していた特権を維持した。これに対して、書籍商トンペール(*Tompère*)とスブロン(*Soubron*)が訴えを出し、アントワヌ・エチエンヌが仲裁に入る。1643 年 3 月 6 日、国務会議ではロコレの特権を追認するが、允許にともなう期間を短くし、ロコレの敵方が共同で出版にあたるよう決定を下した。これにエチエンヌは不満を抱く。ヴィトレと物別れになっていたケネルは、エチエンヌとトンペールの側につく³⁷。

次第に、書籍商間の配置図が表れてきた。クラモワジはアリオと争う。ロコレはクロップジョーと対立する。これはセギエとパリ大司教の対立の写しでもある。ロコレはカルヴィルと結び、トンペール、スブロンとは対立する。ヴィトレとケネルは敵対し、エチエンヌとトンペールは、共同してヴィトレやクラモワジといった大書籍商に対抗する。以上を図示すると、図 1 のようになる(本稿末尾に付す)。

マルタンは「特定の親方を優遇し、その他を犠牲にする王権の傾向が、こうした分裂を引き起こしていた」³⁸とし、王権の政策と書籍商の再編成の動きに言及するだけだが、われわれはこうして現れてきた書籍商間の力関係と配置図に、ジャンセニスム論争の構造を読み込んでゆきたい。唯、その前にもう少し先まで見ておこう。

³⁴ HJM., p.571.

³⁵ 以下も参照のこと。HJM., p.453.

³⁶ HJM., pp.571-572.

³⁷ HJM., p.572.

³⁸ *Id.*, p.572.

エチエンヌ事件の終結

1643 年、アントワヌ・エチエンヌは組合の大多数から新組合長として認められ、大書籍商の有する特権に対抗しようとする³⁹。エチエンヌに大法官セギエと対立する意志があったかどうかはさておき、彼はまず「古い書籍」の印刷特権をめぐり国務会議で有罪判決を受けたエノーに、高等法院に訴えさせる。同年 6 月 18 日、エチエンヌは書籍組合の規定違反を犯したすべての書籍商に召還を命じる決定を引き出す。マルタンはここに「大法官への直接の攻撃」を見ている。7 月 3 日、国務会議から新たな決定が布告され、アリオの特権が再確認されると同時に、エチエンヌには高等法院への上訴が禁じられてしまう。これでエチエンヌの試みは頓挫した。数カ月後、国務会議がエチエンヌの代わりに 4 人の組合長を任命したのは、既に言及した通りである。

1644 年 2 月の監査において、エノーがヴィトレによる執拗な監査の対象となったことには既に触れた。それは、エノーとエチエンヌの関係を考えれば、当然の成り行きであったのである。

1643 年、ヴィトレとクラモワジの新たな対立

1644 年の監査を控えた、1643 年末までの書籍商組合の争議は以上のようなものであった。ところがその後新たに、ヴィトレとクラモワジの対立が表面化する⁴⁰。

1630 年まで聖職者会議ではロラン・チエリとウスタシュ・フコー⁴¹という二人の書籍商を用いていた。その後エチエンヌがこれに代わる。1635 年にエチエンヌが破産すると、聖職者会議は「王の書籍商」であるクラモワジとヴィトレ、そしてクロップジョーに出版を依頼していた。ところがクラモワジはギリシアの教父文献の印刷に興味を示さず、代わりにフランスの歴史家たちの印刷に出資を求めようとしたらしい⁴²。そこで聖職者会議は、トゥルーズ大司教モンシャルの示唆を受け、ヴィトレだけに仕事を回すようになった。このときから、ヴィトレは聖職者会議公認の書籍商となったのである。

こうして聖職者会議の発注をめぐって、3 人の書籍商間に軋轢が生じた。クラモワジはヴィトレに聖職者会議公認書籍商の地位を奪われたことになる⁴³。心理的な解釈に属する個人の怨恨はさておき、ヴィトレが聖職者会議および神学部の多数派に、クラモワジがその反対勢力についたということは想像できる。クロップジョーは相変わらずパリ大司教の庇護を受けている。しかし、このクロップジョーが 1643 年にロコレと対立し、結果としてヴィトレの対抗勢力に属すようになったのは既に見た。「王の書籍商」あるいは「聖職者会議公認書籍商」など肩書きが同じでも、書籍商間には微妙な力関係が働いている。そしてそれは、彼らの庇護者（あるいは背後に控える制度）の力関係の写しでもあるのだ（本稿末尾に付した図 2 を参照のこと）。

さて、以上のような業界の編成と「ジャンセニスム論争」の関係は如何なるものか。次稿

³⁹ HJM., pp.572-573.

⁴⁰ HEF., p.376.

⁴¹ Raulin Thierry ; Eustache Foucault

⁴² HJM., pp.456-457.

⁴³ クラモワジの拒否は、出版業界における宗教書の採算割れと凋落の徴候でもありうる。

ではジャンセニスム論争の見取り図を示した上で、具体的に『頻繁なる聖体拝領について』が巻き起こした論争を追いながら、出版業界とジャンセニスム運動の密接な関係について記述したい。

(以下、次稿に続く)

1640年代の出版業界の配置図

図1 (1643年10月以前)

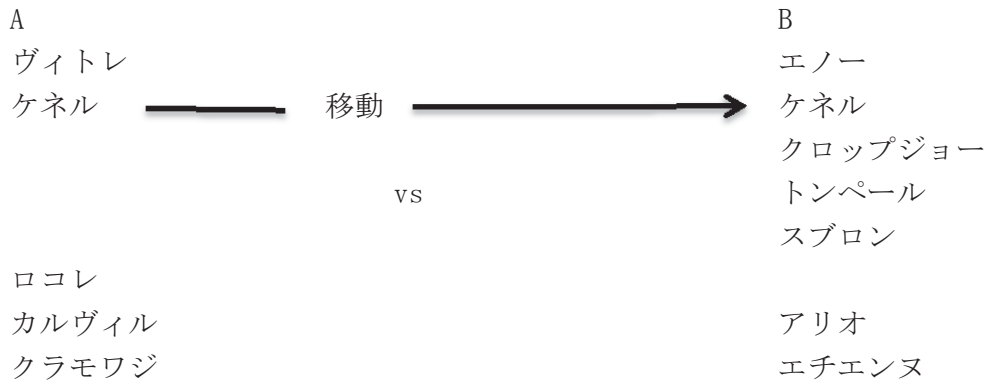
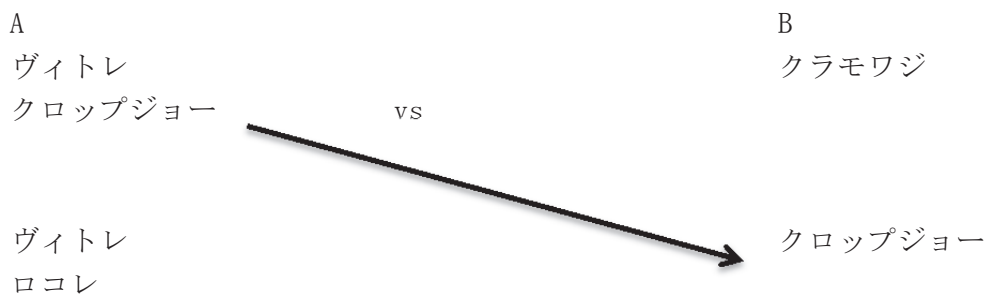


図2 (1643年頃)



本研究はJSPS科研費 15K02381の助成を受けたものです。